

＜座談会＞

必死に進めた台湾事業

下村 満子
岡 檀

前アジア女性基金理事

アジア女性基金業務部長

満州での原体験から

和田 それでは、きょうはアジア女性基金のオールヒストリー・プロジェクトで台湾における事業を進めていただいた過程につきまして、下村さん、岡さんにお話をうかがいます。まず下村さんの戦争体験から話して下さい。

下村 私は終戦を満州の新京で迎えました。私の父親は満鉄という日本の国営企業の関連企業か子会社かよく知りませんが、満州鉱山という会社勤務していたのです。父はそこそこの管理職のポストにいました。実は私の名前、下村満子の満というのは、私が満州で生まれることになっていて、満州の満という字をつけると決めていたらしいんです。

和田 何年のお生まれですか。

下村 昭和十三年（一九三八）なんです。でも生れる前からおうちよこちよいで一カ月早く東京でとび出してしまつて早産だったみたいで、父だけが先に赴任して、母は一カ月後に私を抱いて船に乗つて、満州へ行つて終戦の翌年まで満州にいたわけなんです。

だから私が物心ついた頃のことと憶えているのは、広大な中国大陸のイメージです。新京はそれなりの町で、当時としてはいろんな近代的なビルがあった。満州鉱山関係の日本人の住宅の中で育ち、そこで弟が二人生まれました。一番下の弟は昭和十九年生まれですから、終戦

のときはまだ赤ん坊でした。終戦時の私の記憶は後から

親の説明を聞いて出来上がった部分もあると思います。

私は子供でしたから。ただ、物すごいことが起こつたという何か強烈なイメージ、映画のスクリーンの一コマみたいに覚えているだけで、なぜこういうことが起こっているかなんてわからなかつたんです。多分、共産中国軍と蒋介石軍が市街戦をやつていて、ぼんぼんタマが飛びかっている中に住んでいました。それで、私たちは押し入れの中に入れられて、布団を積み重ねて、そこにどんな弾が入つてきてブツブツと布団に突き刺さるわけです。それで、ご近所の社宅の方が、突然おなかにタマが貫通したから来てくれて、母を呼びにくるんです。実はうちの母は医者で、別に開業していたわけではないのですが、やはり医者としては黙っているわけにはいかないんで、「来てください」と言われれば行く。その弾の飛び交う中を、一人で行かせるわけにはいかないと、父が母の手を引いて二人で出かけ、私たち子供三人は、押し入れの中に入れられたまま。よく生きてたと思うのですが、そういうことがたびたびあつて。ドンパチやつて、夜は少し静かになって、朝起きて、恐る恐る窓から外を見ると、死体の山。銃を持ったまま硬直状態で死んでいる兵士さんたちとか、うちの玄関のところまではいずつて助けを求めてやつてきて、もう少しで玄関に着

くというところで事切れてたりとかね。

私の幼児体験というのは、そういう死体をたくさん見るということから始まりました。そこへ今度はソ連軍が侵攻してきて、私たちの見てる前で父がものすごい勢いでソ連の兵隊に殴られて、男たちが全部連行され、女と子供だけになった。それでソ連軍に辱めを受けるぐらいなら全員死ぬということで、母が青酸カリを調合して、近所の方たちみんなに配つて、私たちも皆、懐に入れていつでも死ぬという覚悟で暮らしていた。中には早まつて一家心中した人が何人か出たんです。でも、それから一週間後ぐらいに、男どもが解放されて帰ってきた。その後、南の方に逃げるんです。屋根のない貨車に石炭がいっぱい積んである上に乗せられて、行けども行けども大平原や畑ばかり、大雨が降つてもびしょぬれのままです。何か南の方に逃げたんですよ。

だけど、そこにも長くいられなくて、ほとんど食べ物家畜のエサのコウリヤンとか粟とかそういうものしかなくて、私もげえげえ吐いて、食べられなかったのを覚えています。そこから帰つて来る道中、親とはぐれて、今思えばすんでの所で中国残留孤児になりかかったんです。しかし、奇跡的に親と再会した。そういう大混乱の中で逃げ惑つて、結局はまた新京に戻ってきたんですが、今度は社宅は全部中国人が押しかけてきて略奪、目の前

で全部略奪されて、そして私の洋服とかおもちゃとか、みんな目の前で持っていかれて、私たちも追い出されて、本当に食えることにも事欠いて、両親は相当に苦労したと思うのです。

そういう中で父は、責任ある地位にいたものですから、社員を日本に引き揚げさせる作戦を指揮していて、自分は最後まで残ったんです。私が引き揚げてきたのは終戦一年後です。私たちは船に乗って、九州佐世保に着きました。

リュックサック一つで、一番下の弟はやつとよちよち歩いて、幸い一家がそろって帰ってこられた。真夏だったんです。その間にも船の中でどんどん結核で人が死んでいきました。

それで、佐世保に着いて、DDTいっぱい降りかけら



下村満子氏

しもむら みつこ 1938年東京生まれ。慶応大学卒業。ニューヨーク大学大学院修士課程修了。65年朝日新聞社入社。90年『朝日ジャーナル』編集長。94年退社。95年アジア女性基金呼びかけ人、理事（ー2006）健康事業総合財団理事長。

れて、馬小屋で何日も待たされて、ついに父の郷里である福島県二本松まで、帰ることになった。祖母がそこにいて、生きてるか死んでるかお互いわからないけど、ともかく帰るということだったんだと思います。だけど、汽車は本当にぎゅうぎゅう詰めの満員電車みたいな状況で、九州から東北まで、長い旅をしました。途中で今でも覚えていて、広島を通って、「これがすごい爆弾が落ちたところだよ」と言われて見たら、木なんか黒こげになっていて、一面野原みたいになっていた。

そんなようなことで、私は何が言いたいかというと、後からずっと思いついてみると、私の幼児の原体験というのは、戦争です。イラクだって、毎日爆弾が破裂したりして、戦争をしているつもりはないけど、市民はみんな巻き込まれているのと同じです。そういう原体験です。

ですから、私は個人として、一人の日本人としては、日本の国に対しては戦争被害者だ、と主張したい。被害者であっても、中国や韓国に対しては加害者ですよね。国として、日本人として加害者ですよ。それは一貫してそう思っています。

ですから、そういう意味では第一義的には、私は、東条さんにしろ誰にしろ、一人の父親として、あるいは夫として立派な人だったかい

い人だったかということと全く関係ない話で、その人が悪意を持ってやったとも思わないけれども、しかし間違ったデジジョンをした最高責任者たちですよ。しかも、

途中から負け戦だということをわかりながら、自分たちのメンツとか、あるいはそういう軍のいろんなことがあったでしょうけど、国民にはうそをつき続けたということによって、ものすごく多くの、何百万人という罪のない日本国民が死に追いやられたわけです。私、むしろ幼児のときよりも、だんだん大きくなって、いろいろ勉強したり親から話を聞かされたりすることによって、私の原体験というのはだんだん深まってきたんです。一つのトラウマになってきた。私の深層心理の中の一部、トラウマでもあり、同時に私の人生観、それから生命観の一部になっていきます。私は一度あそこで死んだというふうに思っているんですよ。

だから、神様が何らかの形で生かしてください、もう一回命を与えてくださったということは、この命を大切に、やはりただ自分のための人生というよりは、少しでも何らかの形で自分の与えられた命を世のため、人のため、日本のため、世界のため、オーパーですけれどもお役に立てて死ぬべきものであって、自分の命は自分のものではないという、深い思いがある。

そういう意味では、私の人生というのは一貫して、

大学生のときも、それからアメリカに留学しても、ジャーナリストになっても、それから今、経営者になっても一貫してぶれてない部分があるのです。

和田 そういう原体験から出発されて、ジャーナリストとしての活動を続けてこられて、そして一九九五年にアジア女性基金に加わるわけですが、そのときの心境を話して下さい。

下村 私はたまたまその後アメリカに留学をするという、当時としては幸運にめぐまれました。私が大学を卒業した時、ジャーナリストになるとか、出版社に勤務したりするとかして、活字周辺の仕事がしたいという希望があったんです。しかし、当時はまだまだ女性差別がひどくて、どこも履歴書すら預ってくれない。その衝撃で、一体どうしたらいいのかと考えました。そこで、あの当時海外渡航が自由ではない時代でしたから、アメリカに留学し英語が自由に話せるようになるということは、武器になるんじゃないかと考えました。それによって自分の選択肢がふえるんじゃないかということでもありました。

そういうことで、アメリカに留学した後、朝日新聞にご縁があつてジャーナリストになったんですが、私の取材の分野というのは、どちらかというと圧倒的に欧米が多くて、その後ニューヨークの特派員になったりして、女性としての海外特派員第一号になって、世界中を飛び

まわって取材活動をしました。中近東とか。中国にももちろん行きましたけれども、メインの分野というのはやはりアメリカを中心とした欧米で、アジアの特派員の経験はほとんどなかったんです。私の個人史の中で中国というのは非常にスペシャルではあったのですが、実際のジャーナリスト活動では、何度も行ったことはありませんけれども、そこに特定して取材したことはあまりなかったのです。

従軍慰安婦問題にぶつかる

和田 それではどのように慰安婦問題にぶつかったのですか。

下村 「従軍慰安婦」問題とか、中国に対して戦争中日本がどういうことをしたのか、そういう歴史の問題については、私は普通の日本人並みの知識しかなかったんです。慰安婦は知ってはいたけど、慰安婦問題に特別深い関心があったわけではありませんでした。もちろん新聞紙上や何かで大いに議論されていて、これは償いをするべきだ、国家補償するべきだといった議論がされていたので、勿論全部読んでいました。

私の心の中では、ジャーナリストとしてやはりこれは基本的に国家補償すべきではないかという漠然とした気持ちがあったのですよ。だけど、私は正直さわりたくな

い、深入りしたくないという気持ちも一方であった。たまたま外政審議室の局長の谷野さんの命を受けて、審議官の美根さんが総代でいらしたんです。それで、アジア女性基金の呼びかけ人になってほしいと言われた。「えっ」という感じで、私としては衝撃で、「いや、何で私なんですか」というようなやりとりをしたと思います。

それともう一つ、赤松良子さん（元文部大臣）が呼びかけ人になるならないで、悩んでいらした。私は赤松さんと親しいので、赤松さんから相談の電話があったのですよ。それで、私も頼まれていたのだけど「どうする？」という話でね。彼女もすごく悩んでいた。赤松さんとは立場も状況も全然違いますよね。彼女は官の側ですし、私はジャーナリストです。でもあのとき私はもう朝日新聞をやめてましたよね。朝日にいたら、私は絶対この話は受けなかった。朝日新聞のスタンスから言ってもね。

それで、赤松さんが、「だったらあなた受けてよ、私断るから」みたいな感じなんです。私の気持ちをあなたに託すからみたいな話で。それで私がもう一回美根さんにお会いして、「私、慰安婦問題の専門家ではないし、本当によく知らないのです。だから、私は適任ではないと思う」と言ったんですが、どういうわけか「是非、是非」とおっしゃって引かない。私なんか多分最後の方で

決まった組じゃないかな。もっと女性が必要だとかそういうことじゃなかったかと思うのですよ。私はさんざん悩んだ。というのは、やはり今もそれが論争の一環になっているわけですけども、国家補償ではない仕組みをつくるわけですから、この組織の一員になるということとは、その仕組みを受け入れるということですから、果たして本当にこれが正しい選択なのかと。

それで私、少し待ってくださいということで時間をいただいて、それからいろいろ自分なりに考えると同時に、何人かの社内外の知識人、学者、ジャーナリスト、評論家といった方々と相談し、個人的に知っている議員の方とかにも、当時の日本の政治の状況の中で国家補償法の成立の可能性なども伺った。いろんなことを調べて、やはり国家補償というのは理想であり、本来あるべき姿だけれど、あのときも今もそうだけれど圧倒的に自民党が強いわけでして、どちらかというとナショナリズム的なものが今ほどではないけど、少しずつ胎動し始めた時期でしたから、まずほぼ一〇〇パーセント実現不可能だということを確認しました。

一方、本岡議員とか野党の方は国家補償を主張し、朝日新聞もはっきり言って、何人かの記者が国家補償、国家補償と書き立て、アジア女性基金を批判するという空気の中でしたから、私としては非常に揺れましたけれど、

いろいろ考えた末、最終的に決断したのは、ジャーナリストであっても、理論だけ言っていてもしょうがないということです。やはり現実論で考えたときに何が一番大事かというところ、国家補償の裁判は、それはそれでやればいいと思うけれど、当面被害者である元慰安婦の方たちにとって何が必要かと考えれば、やはりみんな高齢で、もう既に病気でどんどん亡くなっている、そういう人たちが生きている間に、少しでも完全でなくてもできることをしてあげることだ、と考えたのです。

村山政権が誕生しなかったら、これはできなかった。劇的に成立した連立政権だからこそ、一つの妥協策としてこういうものが実現したのだろう。それだったら、やはり私としては何を一番優先するかというと、被害者に少しでもお詫びの心を表わし、できるだけのことをする、運動家は別にすぐ死なないわけですから、やるなら時間をかけてやっていただく、だけど私はやはり、まだ会ってはいなかったのだけど、被害者の方たちのためにやる、と決めたんです。

朝日新聞の下村だったから、多分女性基金を受け入れたら、たちまち朝日の敵だと、国家補償派から批判されるのは十分承知していました。右寄りの人たちからも批判されるでしょう。どっちから言ったって得な選択ではない。そういう仕組みを受け入れるに当たっては相当悩

んだけど、受け入れ、出来るだけのことをする、と決定したんです。ジャーナリストであり、戦争体験を持つ私として、いろいろ考えた末、やはり今のところこの仕組みしかないし、これができた以上はできる限りやるべきではないかなということです。

和田 呼びかけ人になられて、すぐ理事にもなられたわけですね。

下村 呼びかけ人だけだったのに、谷野さんから言われて、どんどん深みにはまったわけ。

戦後世代として

和田 業務部長の岡檀さんは下村さんとは、全然世代が違い経験も違うのですが、少し話してください。

岡 私は昭和三四年、一九五九年生まれですから、もちろん戦争について実体験はありません。でも子供のときからなぜか、人一倍戦争ということには関心が強くて、大きくなってから何でだろうということを考えてみたときに、一つ、父が上海からの引き揚げ者であったということが影響しているだろうと思いました。

祖父が大日本紡績という、当時あった会社の社員であって、家族みんなで中国の社宅に住んでいたわけです。わたしの父は青島で生まれて上海で育って、当時上海にあった大学、東亜同文書院という大学の一年生のときに、

終戦間際に徴兵されて入隊しました。入隊して軍にはいたけれど前線には送られず、何とか命からがら引き揚げてこられたのです。

下村 そのときは、まだ若いから、結婚してない。

岡 はい、一九歳だったと言っていたと思います。父は引き揚げのことは、余り詳しくは話さないタイプで、たまにぼろっと話すのを聞くと、まあなんという大変な経験だったのかとこちらは思うわけですけれど。すべての持ち物、アルバムも本も置いてきた、お金もちぎって甲板から海に撒き散らしたんだよ、と言っていました。

下村 全部置いてきました。うちもそう。何もない。同じ。

岡 同じですよ。それで、わたしが小学生のときに何気なく父に、もしも戦争がなかったらどうしていたのというようなことを質問したら、父は、戦争がなかったらそのまま中国で学校を出て、結婚して仕事をして、中国で死ぬつもりだったんだよ、と言ったんです。私は子供心にもすごい衝撃を受けました。何だかもうショックで、だとしたら今ここにいる自分は何なのか、自分はどうなっていたのかと、何かひどく混乱しました。

下村 そうよね。あなたはいなかったかもしれない。

岡 そうですね。そういうふうに思っちゃって。だから、小さかったので論理的に考えたわけではないですけど、

そのときつくづく戦争というのは人間の運命を大きく変えてしまうものなのだと。

下村 戦争って、本当にみんなこの頃の人は抽象論で考えるけど、本にも書いたけど、まさに今私が話していることが戦争なんですよ。戦場でドンパチやるだけが戦争ではない。本当に罪のない、普通の人たちが戦争に巻き込まれて行くの。元慰安婦の方はその最たるものだけど、元慰安婦の方たちのみならず、もっとそういう人がいっぱいいるわけです。

岡 基金に入ることになった経緯を少しお話しますと、子供時代から個人的には戦争の問題に関心がありましたけど、アジア女性基金に入る直前はまったく違う分野の仕事に就いていました。その頃はバブルの末期で、企業からザクザク助成金をもらって、日本文化を海外へ紹介

するということをやっていたんですね。ですが一方で、いつの日かきっと、死ぬまでというぐらいの長期スパンで考えていたんですけど、戦争と人権にかかわることを仕事として、ライフワークとしてやりたいというようなことを友人たちには話していました。九〇年代に慰安婦問題で日本が国際的に矢面に立たされるようになってきて、私も新聞記事を切り抜いていました。やはり戦争と女性ということだったので強烈な印象を受けたのです。

で、こうしたテーマに関心があると、その話を聞いてくれていた人たちのひとりに、当時外務省の人事課の人がいらして、彼が覚えていてくれて、「あなたはこういう方面で仕事をしたいと言っていましたよね。政府が基金を立ち上げるようになって、働く人を探していますが、手を挙げてみる気はありますか」という電話をしてきてくれました。

それが始まりでした。私はもう喜んで「行きます、行きます」と。条件も何も聞かずに行きますと言って、でもそれからいろいろ面接とかありましたけれど。当時は仕事の内容としてここまで大変というのは予想していませんでした。外務省の側も同じでしょう。

だから、こう大変だとわかっていたら、むしろ



岡 檀 氏

おか まゆみ 1959年生まれ。慶應義塾大学文学部フランス文学科卒業。任意団体において国際交流事業等に携わったのち、1995年アジア女性基金設立と同時に入職。2005年よりアジア女性基金業務部長。

るあちらが私を採用してくださってなかったかもしれないね。

下村 私もこの大変さを知っていたら、呼びかけ人や理事を受けなかったと思う。私は当時もう既に忙しくて、幾つものいろいろなことをやっていて、中でもこの医療経営は、親の後を引きついだ、もう必死でやっていた時でした。それどころではなかった。

和田 (財)東京顕微鏡院もやってらしたんですか。

下村 だって、朝日をやめたのは、父親が亡くなった後、ここの経営をやるためだったのです。

私も確かにいろんな財団の理事や評議員などやってたわけですが、事実大部分の財団は、理事会とかは年に二回、予算理事会と決算理事会とがあって、余りいろいろ言う人はいなくて、皆しやしんしやんで決まっていた。アジア女性基金も、そういうふうにおしやつたんです。「いやいや、大したことない。大したことないですよ。年に二回ぐらい会議が開かれて、あとは大体しやしんしやん理事会」あれは本気でそう思ったのか、だましたのか知らないけど、そうかなんて思っちゃって、それで引き受けてみたら大変だったわけですよ。

岡 そうです。ここまで大変とは予測できなかったでしょう。うそをおつきになったつもりはないかもしれませんが、まさかこれほどとは。

台湾事業を担当して

和田 台湾事業を担当されたのはどうですか。

下村 どうしてと言われても何もありませんよ。私は台湾のことなんか何も専門ではないし、私自身台湾を受け持たないなどと考えていなかったのですけども、多分結果的には誰もやる人がいなかったからだと思いますよ。

つまり、韓国は和田先生や大沼先生という専門の学者の方々、それから自治労の中嶋さんたちや弁護士の高木さんとか、それから高崎さんとか、専門家がいっぱいいらしたでしょう。フィリピンは有馬さんがもう既にやっていらした。台湾に関しては、専門というか、私は台湾の慰安婦問題をよく知っていますみたいな方が、理事や評議員の中にいらつしやらなかったですよ。

和田 そうですね。台湾をすぐに訪問なさったのでしょうか。

下村 最初何人か一緒に。つまり台湾チームという形で台湾に出かけました。まさにそのときは婦援会(台北市婦女救援社会福利事業基金会)ともちゃんと会ったのです。一緒に行ったのは、岡さんと中嶋さん、多賀さんです。衛藤先生はあのかきはまだ台湾チームのメンバーにはなっていないつしやらなかった。衛藤先生は途中からなんです。

岡 大鷹さんが一番最初からかわつてはいらしたんです。

すけど、チームに参加というような正式な形ではなかった。だけど、最初に名乗り出た温さんという被害者に会われたのも大鷹さんです。高木先生も当初からかわつていたんです。

下村 だから、何か私が特に台湾を希望したわけでもないし、何かあいまのうちに決められてたんじゃないかな。

岡 そうですね。おっしゃるとおり、専門家というのがいなかった。

下村 正直のところ、何て言ったって、慰安婦問題は韓国が一番重要で、主役は韓国なんです。フィリピンは少し特殊でしたね。それで、有馬さんや松田さんがネットワークを組みました。台湾は数からいっても、韓国にくらべて少なく、いろいろ言っても余り表面に出なかった。

岡 台湾では裁判は起きていませんでした。

下村 でも、やらなきゃいけないという姿勢がありました。中国が当時まだ消極的で、中国をどうするかということいろいろ話したんですが、中国政府は当時は、そういうことは一切やらないでくれという話でした。将来は知りませんが。だから、結局あとはインドネシアと台湾を外すわけにはいかないとことになっていった。私は正直言って、台湾の慰安婦の状況なんて、全く何も知らないで始めたんです。

結果としては、本当に台湾でよかったというのは変で

すけども、韓国のような難しいところへ足を突っ込んだら大変でした。これはよく知った方がやらないことには無理でしたよね。

和田 とりあえず最初に訪問されたのはいつだったでしょうか。

岡 九六年の一月だと思います。

和田 それで、そのときは婦援会を訪問したんですか。

下村 最初のときは、詳細は覚えてないのですが、とりあえずアジア女性基金の仕組みを説明し、理解していただくということで、婦援会にも行きました。その前に支給額をめぐって大激論があったのです。

和田 そうですね。

下村 償い金の額が決まらない時に行つたつてしようがないわけですから、その前に大騒ぎがあったわけですよ、いくらにするかをめぐって、徹夜で議論したり、いろいろあった。記者が押しかけてきて夜討ち朝駆け的なことと、それから記者会見だ、やれその間に韓国の慰安婦の方が基金にいらしたりとか、二〇〇万円になるのか三〇〇万円かと、夜を徹して議論があったんですね。

和田 婦援会とどうやってコネクトしたのですか。

岡 それは交流協会が。

下村 交流協会、そうかそうか。

岡 あの頃はまだ普通に、交流協会と婦援会が一応堅苦

しくおつき合いされてきてたので。それで、最初交流協会の所長が……。

下村 そうそう。それでだんだん思い出した。婦援会に行ったら、普通に会えましたよ。だから、最初はこんな、難しいことになると思わずに、台湾は割と対日感情もいいし、一番楽なところに当たったぐらいのつもりだったわけですよ。それで皆で行って、最初に交流協会の所長にお会いした。

岡 当時、後藤利雄大使だった。確かそう。間違いないです。

下村 後藤大使だったかな。何か後藤大使とはその後もずっとお付き合いが続いていたんですが……。

岡 そのときナンバー2の方が、あなた方はラッキーですよっておっしゃったと。

下村 いや、後藤大使のお宅にも呼ばれたし、交流協会の事務所の応接室でナンバー2の人だったかな、とにかく台湾はノープロブレムですよ。対日感情もいいし、この事業をやるには最もやりやすい場所ですから、もう問題はありませんと言われた。大変いい話を聞かされて、すっかりこっちはよかったねっていうことになって、それでその後、婦援会へ行ったんです。

そのときは婦援会にもちゃんと会えて、それでいろいろ話をして、それからその後に元慰安婦五人にも会わせ

不可能だからこれをやっているんで、というような話もしました。

そこに慰安婦のおばあさんたちが出てきて、いろいろ話したんですけども、彼女らは日本語ができるから、私たちのところに後から「自分たちは実はもらいたいけども、そう言うとう怒られるんだ」とか、婦援会の人たちから「もうらうな」とおどされている、とか言っていました。本当は欲しいんだというような話があったのですよ。だから、もうそのときに、おばあさんたちの気持ちと婦援会がおばあさんたちを代弁しているという話には乖離があるな、というのがわかったんです。

裁判で得られる補償と基金の支給とは別だという確認

下村 そのときに結構長時間会ったのです。それで婦援会の人言うには、もしもアジア女性基金のお金をもらっても、国家補償請求の裁判の結果が出て、補償金がもらえることになったときに、一番心配なのは帳消しにされるとか、そのお金をもらったら、もう補償金はいらないとか、そういう心配があるというわけですよ。補償金は二〇〇〇万円ぐらい要求しているわけですからね。こ

っちはたった五〇〇万円ではないかいうわけですよ。それで私たちは、いやそれは全く次元の違う話である、申しわけないが、近い将来裁判に勝って賠償が出るとは

てくれたわけですから、言ってみれば随分優遇されたわけですよ。だけど、何しろそのときの彼らの口調が、そんな交流協会の方がおっしゃるような甘いものではなく、非常に対決的だった。交流協会がこっちの極だとすれば、その反対ぐらい厳しいことを言われたんですよ。

婦援会は、自分たちは国家補償を要求している、アジア女性基金はきれいごとを言っているけども、何のことはない、日本政府が国家補償をしたくないためにごまかしてアジア女性基金を作って逃げようとしている、自分たちはそうした卑怯なやり方は認められないというわけです。

私は、国家補償法をあなたたちは期待しているけど、そんな法律は実現不可能ですよ、不可能だから基金を作ったんですよと説明したのです。その頃社会党の本岡議員が台湾へ行って、自分たちは法律を問もなくつくるといような調子のいい話をしてまわった。私たちが行ったのはその後なんですよ。婦援会では本岡議員の言葉を信じているわけね。それで、一生懸命いろいろ日本の政治状況を説明して、国家補償の法律はできない、それが日本の現実なのだと言ったのです。私は日本のジャーナリストで、日本のジャーナリストだから日本のポリティカルな力学とか今の状況をよくわかっている、だから、私も国家補償が可能ならいいとは思いますが、それは実現

思わない、しかし、これは全く違う次元の話です、国民から集めたお金と医療・福祉支援ですから関係ないですよと言っても、信じないと言う。日本政府からそのことを保障する文書をもたらしてきたら、私たちの話に応じないわけでもないみたいなニュアンスのことを言ったんです。私はそれをまじめに受け取って、もしその紙がもらえるならということで、日本に帰ってきてから、必死になって動き回って、いろんなことをしました。

既にそのとき大鷹さんは台湾チームに参加してらして、台湾にいらっしゃりはしなかったけど、大鷹さんにいろいろご協力をお願いして、ご相談したりしていました。大鷹さんは、もちろん一〇〇パーセントわれわれに協力していらしたわけですよ。今となつては本当に忘れられない思い出なんです。当時の官房長官が梶山静六さんで、梶山さんのところに話に行こうということになったんです。そしたら、ちょうど劇団四季が李香蘭のミュージカルを上演するんで、梶山さんに切符を差し上げて、お誘いしようと思ってアポをとってあると、大鷹さんがおっしゃるのです。私の話を聞いて、「私のアポの時間をあなたにあげるから」っておっしゃって下さった。梶山さんは李香蘭の熱烈なファンですから、超多忙な官房長官の時も、ちゃんと大鷹さんはアポがとれているわけ。それ

で私は、ありがたくそれに便乗して、一緒に行きました。

梶山さんは私の話を聞いて、「いや、それは難しい。できない」とおっしゃったんです。そんな文書を政府が出すことはできない、と。それで私は切れちゃって、ものすごく怒鳴りまくったわけ。「何だっというんですか！」って。「私は政府に雇われてこれをやっているんじゃないやありませんよ」と。「無料奉仕で必死でやっているんです。誰のためにやっていると思うんですか」と。「私は、戦前の日本の男の人たちがやったしりぬぐいを日本の国のためにやっているんです。何で女性の私が、こんなしんどい仕事をやっているか。日本の国のためにやっているんですよ！」と。「もうみんな本当に一生懸命やっている。何ら名誉もお金も地位も何も求めずに。むしろ批判されてやっている。それは、本来は日本政府がやるべきことを、私たちが代わりにやっているんであって、いよいよ困ってこういうことをお願いしても剣もほろろとは、ひどすぎる！」私はものすごく怒って、「だったら、もう私はやめさせてもらいます。私は政府に雇われているわけではないし、外務省に雇われているわけでもないのですよ。自発的にボランティアでやっているの、あしたにでもやめられるんですよ」と。「どうぞこれからは、政府がやったらいいではないですか！」て。

そしたら梶山さん、「いやいや、政府ができないから皆さんにお願いしているんであって、それはもう政府はや

も。いや、本当に感動的な場面で、私もわざと泣いたわけではないんだけど、何かすごく、それこそ私の戦争体験から、トラウマになっている部分、私の深層心理の中にあるものがわっと噴き出したんだと思うのですよ。

その後、私たちはそこを引きあげて、大鷹さんと二人で「李香蘭」を見に行ったんです。「李香蘭」のインターミッションの間に、大鷹さんに電話がかかってきたんです。そしたら、もどっていらして、「下村さん、さっきの話だけど、文書を出すっていうことになったわよ」とおっしゃった。私は感激しちゃって。聞いてみると、私たちが官房長官室を出た直後、梶山さんは外務省の事務次官、関係者をすぐ集めたんですって。それで、婦援会の言ったとおりの文書ではないけど、要するにこの償い金は一切裁判と関係ない。これを受け取っても、何らその他の権利を侵害するものではないとか、何かそんな文書ですね。今残ってますよ。そういう文書を出して下さった。それで十分なわけですよ。

私としてはすごく感動して、梶山さんてすごい人だなと思ったし、やはり年齢は違っても、戦争というものを共有し合った思いというのは、通じ合うものだな、と思いました。それを喜び勇んで、持って台湾へ行ったんです。約束通り持ってきたといっって婦援会に何度も連絡したんですが、全く相手にされなかった。私は、こんなに

れと言われたって無理なんだ。だから、こういう仕組みをつくったんで」って。私はそう言っているうちに、涙がこぼれてきて、わーっと泣き出しちゃって……。何だかしらないけど、涙が止まらなくなってしまった。周りに秘書官の方なんか座ってたんで、びっくりしたんじゃないの。別にやらせで泣いたわけじゃないですよ。何か、これまでの思いがこみあげてきて、大鷹さんが側にいて、どういう状態だったか。まあまあという感じだったのか忘れたけど、一緒に聞いてて……。

そしたら梶山さんが急にしんみりして、「いや、やはりこの戦争の後始末というか、こういうことは、本当に戦争を知っている人間が生きている間に片づけないとだめなんだよな」とおっしゃった。「僕も実は、終戦のとき二〇歳だったか二一歳だったかで、戦争に負けて大変ショックだった」その日、日記を書いたんですって。終戦のときの思いをそのまま。それを「毎年終戦記念日には、その日記を読み返している」とおっしゃっていましたよ。

それで、「あなたのような人や戦争を知っている世代がまだ生きている間に、こういうことは解決しておかないと、だめなんだよな」とおっしゃって、急にしんみりなさってね。それから、「わかった」っておっしゃって。「わかった」ということだけをおっしゃったんですよ。ああいう方だから、余りくどくどおっしゃらないのですけど

までして、一銭の得にもならないことのために梶山さんのところに押しかけていって、ある意味では本当に、命をかけてというか、思いをかけてやってきたのに、婦援会は何らそれに対して反応さえしない。その辺から、やはり残念ながら、婦援会の方たちは、高学歴の弁護士さんとか大学教授だとか、そういうエリート中のエリートですよ。だから、元慰安婦のおばあさんたちの本当の苦しみや心の中はまったく理解していない。自分たちの反目運動のために、おばあさんたちを利用しているだけだと思わざるをえませんでした。そして、おばあさんたちが私たちのところにヒソヒソ言ってきたことは、何しろ偉い先生方から、自分たちのために日本政府から賠償金二〇〇万円取ってやるからとかと言われて、わかんないからくっついていただけのこと、でも何年たってもなかなかお金が来ない。

それともう一つは、台北市からおばあさんたちにお金が出ている。それは結局、福祉といえますか生活保護費というんですか、国や市から出ているんです。

岡 最初は台北市のみでしたが、後になると台湾全体で出るようになりました。

下村 そういうものも全部、婦援会がおばあさんたちの名簿を持っていて、結局、彼女たちは婦援会に囲い込まれていて、自分たちが自由な発言もできないし、基金のお

金が欲しいということも言えない。言ったらもう毎月のお金が来なくなるとおどかされている。おばあさんたちは教育もなく、非常に単純だから、そういうふうには思いついていない。はつきり言って、もう無学で中には字が書けないような高砂族のおばあさんたちもいて、当然そういう高学歴の方たちから見れば、馬鹿にしているような感じでした。

すぐきつい言い方をすれば、結局は彼らの抗日運動の旗印だった道具だったり看板だったり、おばあさんたちは使われているなっている感じで、非常にかわいそう。それで、私たちはおばあさんたちと別ルートでアクセスを持つようにいろいろ努力してきたわけです。それを一番やったのは岡さんなんだけど、話を聞けば聞くほど、おばあさんたちというのは、別にお金に色がついているわけではないし、本当に生活に困窮している人が多いし、それから病気だったり、もうどんどん高齢になって、本当に困っている人が多い。だから、アジア女性基金のお金がもらえれば助かるし、お金だけではなく、もう一つはやはり。名誉の回復ですね。

新しい道をさぐって

下村 でもそういう事情で、一つの暗礁に乗り上げてしまつて。一方において交流協会は、そういうところとは余

りコンタクトもとっておらず、情報収集もしてらつしやらなかったわけです。交流協会もやることがいっぱいあつて、当時日本兵士として戦った台湾の元兵士、負傷した人、亡くなった方、それに対する賠償とか、いろんなことを抱えていて、慰安婦というのは、韓国に比べて台湾は圧倒的に数は少ないですから、仕方がなかったのかもしれないけど。

それでもう一つのルートとしては、台湾政府の外交部を通して、何とかご理解をいただいて、アジア女性基金を認めていただいて、受け取るように婦援会を指導してもらうことができないか、道を探ったんですね。それで何回も何回も台湾に行ってきました。台湾とは一応国交がないことになっていますから、外交部との外交交渉みたいなことまで私たちは、実は台湾に関してはやつたんです。もちろん交流協会の担当の若手の方、諏訪さんとか何人かの若い人がついてはきてくださったけど、もちろんあくまでも事務方として後ろに引いて、私がいわば交渉のリーダーみたいな形になってやりました。

外交部へ何回行ったかな。本当に下のレベルから始まつて、少しずつ上のレベルの人と会えるようになった。最後に、日本では外務次官ぐらいのレベルの方に何とかたどり着きたいと思つた。ところが、途中の部長ぐらいの人で、日本語べらべらで、東大に留学したという人が、

日本語はうまいんですが、結局日本に留学して、反目になつて帰ってきたみたいで、その人が外交部の日本担当責任者にいたりするわけです。ご飯食べたり。いろんなことをして、随分コミュニケーションをしたけど、結局のらりくらりで、最後に次官のすぐ下ぐらいだったかな、相当なレベルまでも上がったんです。上に行けば行くほど、割と話を通じ、理解してもらえたんですが、結局次官までは行けなかった。

どうしてダメなんですかと聞いてみるとやはり婦援会が、さつきも言つたような社会的には大学教授だの弁護士だのという、そういう人たちがいろいろ影響力を持っているからだ、ということでした。もう一つは、台湾の外交部は韓国と違って全部婦援会に丸投げしちゃつたわけですね。だから、お金の支給も、だれにどう支給するのかについても、外交部は関与していない。逆に言えば、関与したくなかつたのですね。だから、自分たちはもうこれにかかわりたくないという態度が見え見えで。それで慰安婦の名簿も婦援会に渡して、予算をつけるけど、後は自由にやつてくれみたいな感じで、引いちゃつたということですよ。

やはり台湾の方も外交部は無理だなと考えて、岡さんと一緒に今度は国会議員を説得しようということをやりました。

岡 ずいぶん回りましたね。

下村 回りましたよ。国会議員つまり、立法院議員にも会いに行つた。立法院議員は、国民党と民進党の両方とも回りました。何とか政治を動かそうと思つてね。でも、その間に、立法院の議員が全員署名運動して、国家補償請求の要求書を日本の国会に送つたなんていうんで、もう全然反対のことやつているんですね。

頼浩敏先生との出会い

下村 その頃に衛藤先生が台湾にお入りになった。私が誘つたのかもしれませんが。そしたら頼浩敏先生という立派な、自分の東大のときの教え子だった人がいて、台湾で弁護士として活躍している。その人に会つてみたらどうかつて。それで、先生も含めて一緒に台湾に行つて、頼浩敏先生と出会つて事情をご説明したところ、先生は、本当にすぐクリアに、「私はこれを政治問題と考えません、人道問題だ」という位置づけにしています。政治問題化しちゃいけないのです。このおばあさんたちを政治に巻きこんではいけない。両国の政治、どっちサイドにおいても、それを政治的に利用されるような位置づけをしてはいけません。これは、あくまでも人道問題です。人道問題として、私は協力します」とおっしゃつたんです。

これは、非常に感動的で明確で、すごいなと思つて。

頼先生がそういうことをされると、いろいろ非難されたり、お困りになりませんか、と訊いたんです。先生は高い地位にいらして、政府の要職にもついておられた。奥様も要職についておられた。でも、頼先生は、それは私がやる以上覚悟の上ですと。そんなことは構わない。自分の信念でやると。

それともう一つは、当時日本政府の奨学金をもらって国費留学生として日本に留学したおかげで、自分は今日の地位を得た。あのときに留学しなかったら今の自分はない。自分は本当に日本に対して感謝の気持ちで、できる限りのお返しをしたいと思っているとおっしゃいましたね。そういう気持ちでやります、と。

私、あれだけ立派な人物にめったに会ったことないです。やはりすごい方ですよね。そういう方を紹介してくださったということは、本当に衛藤先生の大変な功績であることは、明確なことです。そのおかげで、いろいろ開けてきたということですね。

和田 それで、頼浩敏先生のところを窓口にして申請をうけつけることにして、台湾の新聞各紙に広告を出してもらったわけですね。

下村 全部は言えないけれども、一方に頼浩敏先生がいるが、他方、外交部を通してとか、あるいは婦援会を通して名簿をいただいってとかという、公的なルートといいま

すか、そういうことはできなくなったわけなんで、後はもう本当に個人ルートというのか、そういうことしか方法がなくて。

一つは、もちろん公式に台湾の新聞三社に、広告を出して、基金のこと、償い金の仕組みを広く告知しました。でも、字の読めない方もいるし、どれだけそれが効果があったかは知りませんが、一応公けにする必要がありましたから。それをやりまして、同時に個人的なコンタクトで、慰安婦の方を知っている人を通して話を伝えていただき、希望するなり、興味をお感じの方には会わせていただくという方法をとったんですね。

頼浩敏先生は、最終的にそういう方が来て、その方に償い金を渡す時、とにかく支給するときには必ず先生なり先生の事務所の方が弁護士として立ち合って、きちつと手続をして、後からいろいろ問題が生じないような形にしてくださいました。それから、私どもがいつもそこにいられないんで、電話の窓口になってくださる連絡先とか、あるいは何か質問があったり、あるいはどうしたらいいかというお悩みを持ったおばあさんが、必要があれば頼先生が会ってくださいるという、そういう形ですね。

もう一方で、これはお名前は明かせませんが、台湾に長いこと住んでいるジャーナリストの方で、台湾の原住民の研究というか、取材をよくされていた方がいて、

その方は慰安婦問題とは関係なくやってらした方ですが、原住民の取材をする中で、原住民の中にもかなり元慰安婦の方たちがいらつしやって、もう高齢になられていて、そういう方たちと会っているいろいろインタビューをしたりする中で、そうした過去の体験とかがわかって、結構それなりの大勢のネットワークを持っている方で、その方にもお会いするチャンスがあつて、私たちの意図と趣旨をご説明をした。

その人は、どちらかという、目立つことをするとかそういうタイプと全く逆のタイプで、非常に地味な方で、本当にこつこつと人が余り省みないようなところを掘り起こして取材をしていた。本当に立派なジャーナリストなんですけど、その方と、またこれもご縁があつて、出会って、それでいろいろお話している間に、やはりこの人は大仰に、戦争責任がどうのこうのというアングルよりも、どちらかというと自分が取材で出会った、本当にたくさんの方との交流がとて深まっています、そういう中でいろいろ悩む相談を受けたり、自分の夫にも言えない過去の話を聞かされたり、今の生活の苦しさとか病氣、そういうことを聞いていて、もう家族みたいな気持ちになって、世話をしている方です。国家賠償だ、戦争責任だという発想ではなくて、極めて密着型の中で、

この人を何とかしてあげなきゃいけないという、どちらかというところという本当にグラスルーツのところから出てきた方です。私たちの話を聞いて、そういう医療福祉費とか償いの費用が仮にワンタイムのものであつても、それはもう日頃のそういう人たちの生活を見てたら、どれほど助かるかということがわかるし、そういう権利があるならば、できるだけそういうことを知らせてあげて、それを手にするための支援をしてもいいというふうにおっしゃってくださいました。ただ、向こうに住んでいていろいろ活動しているから、余り表に出られないけれども、それはもう本当に誠心誠意あらゆるサイドからいろんな形で私たちを助けてくださった。

頼浩敏先生が表の顔というか、台湾の方で、非常に社会的地位もある方で、もう一人はそういうふうな、本当にグラスルーツの方ですけれども。このお二人の協力で、台湾の事業というのは、何とかある程度実現できたのだ、と思っっています。残念ながら、全員ではなかったけれども、これで五年ぐらいかかりましたが、何とかお手渡しして、かつ大変喜んでいただくことができたということです。

最初のお渡し

下村 第一回目のお渡しのときは、もう本当に大変で、や

はり反対運動をする方たちに身分が知れたら、私たちは構わないんだけど、被害者の方たちがそれによってパッシングを受けたら、政府からもらっているお金をとめられたりとか、そういうことになりそうな心配がすごくありました。おばあさんたちもそのことを非常に恐れていたのも、プライバシーを守ることと、差し上げたということは絶対に秘密にするという約束のもとに、それを実行しようとしていましたから、大変だったんですね。

それでも何とかそこまでこぎつけて、台湾での最初のお渡し式みたいなことを台湾のホテルでやりました。その前の日に苗栗に行ったんだっけ、どっちが先だったっけ。苗栗じゃなかった、新竹。

岡 はい、新竹に先に行っていたんだ。

下村 そうですね。新竹というのは、台北から車で行った。何時間もかかって行った田舎で、小さな少しだけがたがたしたホテルでお会いしたんでしたっけ、あのときは二組、三組だった。

岡 二組です。

下村 二組の原住民の方ですけども、それでご主人もついできててね。そこで初めてお渡しした。そのときには、頼浩敏先生の事務所からも一人同席していただいて……。

岡 同時進行オペレーションなので、グループ分けした

んですね。私はご一緒しなかったグループですよ。

下村 そこで償い金を、ご説明をしてお渡しして、日本の総理大臣の手紙を読み上げ、理事長のお手紙を読み上げ……。やはり皆さん、本当に感動的なのは、ほぼ全員そうですが、確かにお金も大事なんです、一番彼らが感動し、本当に泣いて、中には号泣するような方たちもいるというのは、やはり総理のおわびの手紙なんです。ね。みんな日本語がわかるから日本語で読み上げると、もう泣いてね。声を上げて泣く方や、ただ声を出さずに泣く方とかいろいろですけど、私に言わせるとお金なんて五〇〇万で一生を償えるわけではないし、やはりそういうことじゃなくて、アジア女性基金で、一番大事な部分というのは、この魂の部分。額はたいしたものではないかもしれないけど、一番大切なのは魂の部分である総理の手紙と理事長の手紙だと思うのですね。

私が接した限り、ほとんどの方が、この手紙をいただいただけで私はもう死ぬと。それから、先祖のお墓に入れてもらえると書いていました。身の証になると。それは、日本が悪かったんだと、日本の総理大臣が詫びてくれていると。

はっきり言って台湾というのは、漢民族といわゆる原住民の関係はよくないんです。どちらかというと原住民の人たちというのは、戦争統治下にあったときの日本に

対して、好意を持っている方が結構多い。日本をずっと

信じてたけど、五〇年、六〇年たって、あなたたちは私たちを見捨てなかったとか、私たちを捨てないで来てくれたというような受け取り方をしてくれました。婦援会などが国家補償でなければだめだと言うのですが、そういうのとは全く違う受けとめ方で、非常に喜んでいただいて、終わってから食事をしたときも、みんなで即興の詩と歌を唱ってくださって、私たちを遠来の客として、「日本人は本当にわれわれを忘れなかったのだ、信じてはいたけれど、やはり忘れないで来てくれた」みたいな、そういう感じで、こっちも何とも言いようがなかったんです。

それから、そのときに聞いた話で私にとって印象的だったというか、ショックだったのは、やはりご主人が日本兵として徴兵されて戦っているときに、夫が一生懸命日本のために戦っているんだから、あなたも一生懸命日本のために貢献するべきだみたいなことを言われて連れて行かれて、そこで慰安婦にされたというんですかね、屋間は雑事をさせられて、夜には多くの兵士の相手をさせられた、というケースが結構多いですよ。戦争が終わって帰ってきてても、ご主人には全然、言えない。言えなかったと。何年もたってから告白したという人もいました。

岡 五〇年後に初めて。

下村 そのご主人が一緒についてきているんですよ。ですから、いろんな人生ドラマについているのかな、そういうものがあるんですね。頭数から言うとう慰安婦何人とか、そういう数字で片づけられているケースが多いけれども、やはりそのとき感じたのは、そういう一人一人に人生があって、一人一人がその傷を負って、人生が一〇〇パーセント変わってしまった人、不幸になってしまった人、沢山いるわけです。例えば、日本兵の場合、一つずつ名前とか覚えてないけど、日本兵の慰安婦をやっている間に、だれの子ともわからない子供を身ごもって、その子供を産んで育てていたりとかね。

それから、中には悪い話ばかりじゃなくて、そうやって慰安婦をやっている間に、何人もの兵隊の中の一人と恋に落ちて、いい男女の関係になって、戦争が終わってその人が帰っちゃって、でもその後何年もたってから手紙が来て、日本に呼んでくれ一緒に日本を旅行したとか……。二人で日本旅行をしたときの写真なんて見せてくれたりするんですよ。

岡 そんなこともありましたね。

下村 私が言いたいのは、本当にドラマ。人生は、一人一人にドラマがあるね。一人一人の人生がみんな違って、本当にたかが無教養な女ではないかと、どうせ売春婦

だとかって、こうした女性たちは何か会ったこともない人たちが言っているわけだけど、会ったこともないのによく言えるなと思うのですけども。会ってみると、本当にその一人一人にとって、一生というのはものすごく大事な一生であり、この戦争によってみんな人生が変わったりとか、いろんなことが起こっているんですね。私やはりこの事業に参加して、本当に考えさせられましたよ。戦争で一瞬に吹き飛ばされた人たちがいっぱいいて、そこには子供がいたり兄弟がいたり、親がいたりという悲劇もある。

だから、いろいろおもしろいんですよ、一緒に日本旅行をさせてくれたその人はもちろん、結婚しているんですよ。だから結婚できるわけじゃないけど、でも、人間らしい話。そういういい話とか。日本兵からひどい目に遭って、銃で突き刺された人もいる。逃げようとして突き刺されて、その傷あとを見せてくれた人もいましたし、一方において、優しくしてくれた人もいたとか、いろいろでしたけどね。

基金に対する対抗策

和田 そして、事業を次々となさっていかれたわけですが、けれども、それに対して今度は婦援会と李敖さんですか、オークションをやって得たお金を配るという話が起こり

しましたね。

下村 この一〇年間の台湾での活動は、アジア女性基金の中では一番小さなグループで、韓国に比べたら困難のレベルもまだましだったのではないかしら、でも、本当に小説みたいなんですよ、一難去ってまた一難というんですかね。困難を克服すると、慰安婦だった方々の一部に受け取りたいという気持ちを持っている人たちが出てきたわけです。アジア女性基金のことは結構知られていて、それだけに婦援会は、受け取られたら大変だ、彼らのメンツもつぶれるし、婦援会の活動の説得力もなくなる、あとは政治的な思惑とかいろんなものが絡んででしょうけども、李敖さんという人がある提案を発表しました。あの人は政治家でしたか。

岡 はい、当時は立法院議員です。

下村 パフォーマンスのためかどうか知らないけど、自分のコレクション、書画骨董を売って、オークションをやって、そのお金を慰安婦の人たちにあげると発表しました。それを受け取ったら、アジア女性基金を受け取らないという誓約書を書かせたと言われています。それも変な話だけ。

それから一方において、よっぽど立法院とか外交部が弱いのか、婦援会がよっぽど力があるのか知りませんが、婦援会は、とにかく日本政府から取る賠償金の前渡

しとして台湾政府が立て替えて五〇〇万円を元慰安婦の方たちに配れと言い出した。私も驚きましたけど、政府がそんなこと簡単にできるのかと。だけど、そのくらい逆に、アジア女性基金のインパクトは大きかったということでしょう。

初めは婦援会も非常に調子よかったですけれども、その間にジュネーブで国連の人権小委員会なんかに出席してみると、婦援会がどんどんかたくなになったかということがわかってきました。これは韓国の挺対協と婦援会が連携をして、婦援会が挺対協の小型版みたいになってしまった。私も一国の政府がそういうプレッシャーグループによってそう簡単に、変わるものなのか、日本では考えられないことですけどね、だけど、女性基金のインパクトが、ある意味じゃそれだけ大きかったのかもしれない。それでますますおばあさんたちは、おびえるということになっていった。でも、結構それでも受け取る方は出てきました。だから、そうした婦援会の挺対協との連けいがなかったら、もっと受け取ったかもしれない。私たちにとっては大きな衝撃になりましたね。

だけど、私たちはおばあさんたちが償い金を受け取ったことについて絶対に秘密を守ることには徹底してました。どんなに罵倒されようと、何と書かれようと、それはかまわない、おばあさんたちの名誉と秘密を守る

ことが最優先でした。元慰安婦の方たちの身になれば、実際に役に立つものが大事で、形はどうでもいいんです。しかも、もらった方たちは全員喜んで感謝感激で、今でも会いに行くと本当に喜んで迎えてくださる。

つまり、悪い関係では全然なく、個人的にいい関係がずっと続いています。それは、さっき言った、日本人のジャーナリストの人がずっとケアをしていて、彼を全面的に信頼していて、婦援会なんかよりもはるかにそちらを信頼しているわけです。ただ、婦援会に怒られると怖いから、何か複雑というか残念というか。何で、そこまで妨害しなきゃいけないのかというのは、それだけ日本に対する、憎しみとか、あるいは、韓国もそうでしょうけども、台湾の若い世代がですね、反日になっている。オールド世代は、非常に親日だけでも、若手世代は、日本から遠くなっているって、ほとんどリーダーたちはアメリカなんかで教育を受けている人たちですから、今の中国の反日運動ではないけど、そういうのに近い観念論的な反日思想があるのかなと思うのですね。

韓国人元慰安婦と会う

和田 それではもう一つ、これは台湾の事業ではなく、韓国の方にお渡しする事業にも参加いただいているんですけど、そのときの様子を話して下さい。

下村 あれはもう本当に感動的な話で、忘れられない。私は海外には仕事柄よく行くのですが、あるとき、訪問先の市の民間交流の古い財団で慰安婦問題とはまったく関係ない、二国間関係について講演したときに、レセプションになったら、声をかけられたんです。「アジア女性基金の理事の下村さんですね」って。びっくりしたんです。「私はこの市に住む韓国系の弁護士です」と、その人は自己紹介しました。事前に全部調べていて、私に会うためにわざわざ来たらしいんです。「ちよっとお話が」と言われて、会場の隅に連れていかれたんです。

「私の依頼人に……元慰安婦の人がいます。自分は実は日本政府に対し慰安婦に対する国家補償を要求する運動をやっている。この市内でもデモなどをやっている。自分分はアジア女性基金にも反対だし、アジア女性基金のお金を受け取ることに反対だ。しかし、自分の依頼人が償い金を受け取りたいと望んでいる。自分は個人的に反対でも、受け取りを望んでいる依頼人の希望をかなえるというのが私の仕事だから、それであなたに少し話を聞いて、どういうふうにすればそれがもらえるのか、手続の方法とかそういうことも聞きたいと思って、きょうは来ました」というようなことを言ったんです。私は仰天しちゃって、「それは本当にありがたいことだ」って言いました。私は韓国事業は別の人が担当しているけど、で

も別にだれが担当してもいいんだから、たまたまご縁でこういうことなら、早速私が話を通しましょう、と言いました。

それで、とにかくその日はそのままで、彼と名刺交換をして、彼の事務所に翌日か翌々日行っただけです。さらに詳しいことをいろいろ聞きました。「じゃ、わかった。日本に帰ったらすぐに詳しいこと、手続の方法とかそのフォームとか、関係資料を送ります」と言いました。そこから始まって、何回も彼の事務所とでやりとりして。確かあのとき、あなたが一緒に行ったのだったわね。

岡 はい、ご一緒しました。

下村 とにかく受け取りたいという希望をかなえるのは基金の役目だし、受け取りたい人には渡すということが原点でしたから、それで私たちは、その市に行きました。本来に一泊二日ぐらいで行ったんです。それで、繁華街にある日本食のレストランの畳の部屋を予約して、お昼をいただきながら、ゆっくりお話をして、それからそこで償い金のお渡しのセレモニーをやりましようっていうことだったんです。間接的に弁護士を通して入ってきた情報によると、本人は別にあなたたち日本人とお昼なんか食べたくもないし、弁護士に任せなかったらしいんだけど、ただ本人の受け取りサインが必要だから、それは出てきていただかなきゃならないという話になって、多

分渋々だったと思うのですが、ミーティングが開かれた。

でも今でも忘れられない。あなたも覚えていると思うけれどね。レストランで私たちが先に行って畳の部屋で待ってたら、来てくれたんです。すごくきれいにおしゃれしてね。

和田 弁護士さんも同行してきましたか。

下村 同行してきましたんですよ。そのときは外務省から一人、若い首席事務官が同席して。だから、五人でしたね。私たちは向こうからいらっしやるところをこちらから迎えたんだけど、にこりともしないし、少しこわばった顔をして、目を伏せて、こちらの顔を見なかったのですね。それでずっと顔を見ないでやり取りしてたんだけど。とにかく、手続の説明や何やかやとやって、お金をお渡しする前に、総理のおわびの手紙を先に読んだんです。総理の手紙を読み始めると、その頃からもう泣き出してたんだけど、理事長の手紙になると、理事長のお手紙の方が長くて、もう少し感情というか気持ちの部分が入っていた。すると、その韓国の元慰安婦の女性は、もう感情を押え切れなくなつて、本当に、「ぎゃーっ」と叫ぶような、からだの奥底からしぼり出すような声で泣き続けたんです。号泣と言うんでしょうか。

で、途中で私も手紙を読み続けられなくなっちゃって、

こちらもうすごい衝撃で、畳の部屋で和食のテーブルに向かい合ってすわっていたんですけど、途中で私は向こう側に行つて、彼女を抱いて、「ごめんなさいね、ごめんなさいね」って、言い続けながら、一緒に泣いてしまいました。私もなぜそう言ったのかわかんないんですけど、彼女を抱きしめて、ただ、ひたすら「ごめんなさい」と泣いて言い続けました。そしたら、彼女がわんわん泣きながら、「あなたには何の罪もないのよ」って。「遠いところをわざわざ来てくれて、ありがとう」というような趣旨のことを言つて、でもずっと興奮して泣いていて、しばらくお互い抱き合いながらそういう状態でいて……。

私は、「でも私はあなたは私に罪がないって言つて下さったけど、でも私は日本人としてやはり罪があるんですよ」と言いました。「日本の国民の一人として、あなたにおわびしなきゃいけないんです」というような、そういうやりとりがあつて。それで少し落ちついてきたんで、また元の席に戻つて、残りの文章を読み終わつて。そして、彼女の顔付きが、トゲトゲしいこわい顔から、やさしい顔になっていたんです。つきものが落ちたように、変わつていた。

岡 そうです。全く。

下村 そうですよ。つきものが落ちたような感じでした。顔がすっきりとして。

岡 同じ人とは思えないくらい。

下村 まるで人相が変わって、まさにつきものが落ちたたというのとはあのことでしょうね。そして、私の顔をちゃんと見て、それからポツポツと自分の身の上を話し出したんですよ。いろいろ話しましたが、非常にいい仕事があるという紹介で、一年も働けば家が一軒建つみたいな話で、そういういい話ならと思って自分はそれで行ったんだけど、汽車に乗せられたら、次々と若い女性が乗せられてきて、どこに連れて行かれるのかわかんないような状態で、途中でおかしいと思っただんですって。だけど、もうそのときには逃げるとか降りるとかできない状態で、どこだか忘れましたが、いわゆる慰安所に連れて行かれて。

和田 中国ですか。

下村 私はよくわかりませんが……。

岡 覚えてないですね。

下村 結構長旅で連れて行かれたと言っていましたね。韓国国内ではないでしょう。それから、もう地獄の人生だった。自分の人生はめちゃくちゃになった。国へ帰っても、親戚・縁者から汚い、ダーティーな女という扱いで、だから相手にも汚くなって、もちろん結婚もできなかった。本当に自分の青春を返してほしい、私の一生を返してほしいというようなことを言っていました。

何でこの国にいるのと聞いたたら、自分の妹がこの市にいて、自分は身寄りがないからこっちへ来たんだけど、結局こっちへ来ても、おいやめいの結婚式にも呼んでもらえないという状況で、とても孤独でつらい生活をしている。本当にかわいそう。もちろん過去の話などは、だれにも言えなくて、親戚にも親にも兄弟にも言えない、胸におさめていたのを、私たちにその何十年分をバースとはき出したことによって、つきものが落ちたように。少しスッキリした、ということなのかしら。それで解決するわけではないけど。

その後は、非常に穏やかに笑いも混じえて、いい昼食会になった。もちろん償い金も差し上げて、サインをいただいて、非常に私にとっては感動的な経験でした。本当にお金の問題ではない。謝罪というのはやはり真摯にこちらが心をこめておわびすれば、相手ももちろんそれで過去を取り戻すことはできないけども、そのまま背負って死ぬに死に切れない方たちが、こちらが心を開いて、まず真摯におわびと相手の話を聞いてあげてということが、大変ないやしというか、ヒーリングというか、救いになるのだと私は思うのです。そう実感しました。ハートと誠意です。

だから、お金というのは、私は最初から思ってたんですけども、おわびをするときに菓子折りを持っていくで

はないですか。ま、そんな程度のことですよ。お金で過去はもどらないし、苦しみも消えない。菓子折り、まんじゅう一つ持っていたから、それで償いができるわけではないけど、でも行くときには、何かシンボリックな意味で何か持つていく、その程度のものだと私は思っているんです、このお金の五〇〇万円なんていうのはね。だって、それで人生取り戻せない。だけど、それよりもおわびする方の態度とか、心持ちとか、そういうことが大切なのでは。ただ形式的にやっているか、心の中では日本は全然悪くないと思って形だけやっているか、そういうことは、人間として、敏感にわかんと思うのですね。

だから、一番のいやしのプロセスというのは、岡さんもずっとその後やってあげているような、ずっとその後もフォローアップして話を聞いてあげるとかが大事なのですよ。そういう人たちは不幸なんですよ、家庭も、結婚しても息子がどら息子だったりね。お金をみんな巻き上げられちゃったりとかね。その後も不幸が続くんだけど、そういうお話聞いてあげるとかいろんなことが、いやしと償いのプロセスだと私は思っているんで、韓国のおばあさんの中には、うちで健康診断してあげたり、病気の治療をしてあげた人もいます。さきほど述べたその韓国の女性に会った時、外務省の若い方が一緒に同席して、「きょうのこの経験は、僕の外交官生活の今後の一

生の糧になります。すごく感動しました」って言うてました。自分は戦争を知らない世代なので、なおさらですと。

それと同じことが、実は今思い出したけど、最初の新竹で償い金をお渡しした時に、その時はたまたま、大蔵省から外務省に出向していた若い大蔵省官僚の人がついてきてたんです。その人が同じことを言っていました。

岡 いまだにおっしゃってますよ。

下村 ああそう、「感動しました。僕はきょう本当に来てよかった」と。「私の人生にとつてこの経験がどれほど今後の糧になるか、プラスになるか。本当にありがとうございました」と、ずっと帰るまで言い続けたわね。

だから、逆に言えば、私にとつてもアジア女性基金での経験は、本当に私の人生のすごく大事な奥行きになったというか、私にとつてもすごいプラスの経験というのかしら。そういう意味では、私はアジア女性基金にかかわってよかったと思っています。

和田 手紙を読まれたのは日本語ですか。

下村 日本語です。日本語わかるんですよ、ちゃんと。みんな大体あの世代はわかるんです。その韓国系の、国家補償を日本政府に要求する運動をしてきた弁護士さんが同席してたんですよ。彼はビジネスとして同席していた。彼女からお金を取ったかどうかは知りませんが、同

席して、黙って聞いてた、一言も余計なことを言わないで聞いていたけども、後から、非常に感動的な手紙を、あれは本当によかったという手紙をくださったんで、彼もやはり人間だから、わかったんでしよう。だから国家補償の要求を取りやめるということとは別かもしれないけども。

アジア女性基金の活動を振り返って

和田 アジア女性基金を振り返られて、どうでしょうか。

下村 この経験というのは、私個人にとってはいろんな意味で、非常に良かった、私の人生にプラスだったと思っ
てます。慰安婦という言葉を活字や何かで見ても、実際に会っている人ってほとんどいないのですね。私も以前はそうだったわけですから。やはり現実これだけの数の方たちに本当にお会いして、償い金をお渡しして、謝罪をしてというところに自分が居合わせた、ある意味では日本の歴史の重要なところに個としての接点を持った、ということは、すごい経験であり、私がいろんなことを発言する上で、具体的に確信を持って発言できるようになりましたし、大変成長したと思います。

だけど、この仕組みについて言えば、かかわった方たちがみんな、はじめ予期したより何十倍もの苦労を現実にはなめさせられたと思います。ほとんどの方が、もう

いの事業をし、国民からの浄財というか、全国民からの志あるお金を集め、無名のいろんな方たちの償いとおわびの気持ちを表す非常にクリーンなお金であるというのは一面事実ですよ。でもそれだけではない、政府が道義的な責任ということから、医療福祉支援事業費という形で、税金の一部を加えている。私たちの間でも何回も何回も説明聞いて、いろいろ議論して、わかったようでわかんないところがあった。ましてや外から見ると、それが一体国家補償に近いものなのか、政府のお金が入っているなら、国家補償かって聞かれると、そうではない。じゃあ純粋民間かというと、でも政府のお金が入っている。事務局は政府のお金でやっている。線は引けない。どこからどこまでがどうなのかとか。政府のお金が入っているの、最終的には政府がコントロールしようとする。

つくったときからその辺があいまいで、だれが重要な決定をするのかということも、あいまいだった。普通は財団が実質的な主体性を持つなら、つまり民なら自主的に自分たちが理事長を選び、理事長と理事とでデシジョンをするべきです。でもこのように官がお金の一部を出しているということは、官ということは税金ですからね。公的なものです。民の国民のお金と官のお金のコラボレーションというのは、非常に初めはある意味では理

途中で嫌になったり投げ出したくなるぐらい、こちらも苦しんだし、本当にこちらとしては、まったく無欲で、何の欲得もなく、ただひたすら償いをするために必死になって、みんな忙しい中を時間をつくって、真摯に議論をし、行動してやっけていても、日本のマスコミもそれをネガティブなこととか書かなかったし、それからいわゆる慰安婦をサポートしていると称する日本の支援団体とか、NPOとかNGOの人たちからも、多分理解されないというか、批判的なことを言われるケースがほとんどだった。ましてや、慰安婦なんかいなかったとか、土下座外交だとか言っている、いわゆるナシオナリストたちからは、もちろん批判され、その上現地に行っても誰からも理解されず、という意味では、やはりある意味では不幸な星のもとに生まれた基金になってしまった感がありました。それはだれが悪いということよりも、日本の歴史と時代との関係もあるかもしれない。あのとき村山政権が誕生したからこそ基金が実現したんだと思うから、村山政権が誕生しなければこういう仕組みさえできなかったのでしょうか。

じゃあ、なかった方がよかったかというと、私はそれはやはりあった方が絶対よかったと思います。ただ、このアジア女性基金というものの自体の性格が非常にあいまいな部分がありまして、一見、民と官が一体となって償

想的な形かなと、私も思ったし、思いたかったし、もちろん人に説明するときにはそういうふうにやっています、しかし結果的にはそこが非常に曖昧模糊としていて、いつも私が怒って理事会で発言していたように、何か一番大事なことを決める時に、理事会で自主的に決断しようと思うと、外務省とかアジア地域政策課とか外政審議室とかがそれは困るとか何とか言って、結局は理事会の意思では決定できない。しかも、理事会の方も理事長の方も、専務理事も政府の顔色をうかがってしまっていて、まるで何かそういうところの下請をやっているみたいになっていた。

一方、別の大事な局面になると、それはもうアジア女性基金の責任ですからって、さっと官の方が逃げちゃうとかね。都合のいいときは知らないよ、勝手にやってくれ。今こういうときこそ官の力が、政府の力が必要だと切実に思う時は逃げられるし、それでもうちが自由にやろうと思うと、例えば支給の時期とかいろんなことにに関して、今広告出すとか、そんなことまで、コントロールされた。

私自身は構わないのですけれども。私自身、私は何でも引き受けると名前だけで引き受けるということとはしない主義なんです。引き受けた以上は、何らかの形で参加する。自分が一切出席できないようなところの理事とか

にはならないという主義ですから。それと同時に、何だかどどん深みにはまっちゃったところがあるんですけれども。そうやって一生懸命やればやるほど、非常な矛盾を感じたのは事実です。

だからといって、私はじゃあどうすればよかったのかという答えはないし。私が参加した時は、もう仕組みは出来ていましたから。これ以外の方法はなかったんですよ。基金はなかった方がよかったなんては全然思いません。ただ、やはり理事会の方は、一〇年間同じ人が原則ずっとやってきて、それだけの歴史を積み重ね、経験を積み重ねてやってきたわけです。ところが、どうしてもこれはもちろんいたし方ないことかもしれないけど、官の側の担当者は次々と二年に一遍ずつ変わって、またゼロからやり直す。またゼロから説明する。あるいは、引き継ぎもどこまで引き継いだかわからないような形。そうすると、非常にむなしいです。

それと、コミットメントもやはり全然違いますよね。コミットメントの仕方が個人差がある。皆さん個人的なパーソナリティーもあるし、それによってやはり非常にこのことを大切だと思ってくださる方と、とにかく面倒くさい、早く形だけやってという方とか、いろいろでした。

それから、同時に年限を経るうちに、だんだん薄まっ

題をシミュレーションし、研究すべきではなかったかな、と思います。思いつきでやったとは思わないけれど、多分つくった方たちにとっても想定外のことが余りにも多く起こり過ぎたということは、残念ながら事実ではないかなと思います。

だから、みんな一生懸命、本当に夜も寝ないように、みんなやったのです。和田先生も一番大変なお立場でしたけど、よくなさったと思います。原前理事長が私におっしゃってましたよ。何かのときに事務局の部屋で、「いや僕は長い人生、いろんな人に会った。国会議員とも経営者とも官僚とも。だけど、この年になるまで、世の中にはあなたたちのような、何の報いも求めず、名誉も求めず、お金も求めず、地位も求めず、批判されながらも真摯に、こんなに純粹に一生懸命やる人たちがいるというのを知らなかった。あなたたちと知り合って、私は本当によかった」って、本当に感動的なことをおっしゃってくださいました。

亡くなられて、一周忌に奥様のところにお線香を上げにうかがったときに、奥様が、「主人は、基金の理事長を最初は正直しぶしぶ受けたと言っていました。それが途中から、本当に主人も変わって、いつもいつも女性基金の話をしてました。一生懸命でした」と言われて、私におっしゃったようなことを奥様にもおっしゃっていたとの

ていくというんですかね。はつきり言って、一〇年前の熱意とパッションと、その後とはまるで違う。梅田課長のような方がやっていたときが一番ハイライトで。あなた自身のパースナリティーもあったと思います。それで何とか突っ切って、支給もできたと私は思っていますけどね。梅田さん自身外交官なんで、台湾とは国交がないわけですから、外交官ビザでは行けないんで、ツーリストビザで一緒についてらして、しかも支給するときには、もう現場には絶対居合わせるわけにはいけないので、隣の部屋でひそかに待機して待って、全部セレモニーが終わって無事償い金を差しあげた所で、隣の部屋からぱちぱちと拍手が聞こえてきたんですね。梅田さんの孤独な拍手が。彼は隣の部屋で感動して、隣から拍手したわけです。

そのぐらい、やはりみんな神経を使って、みんな愛情を持って一生懸命やっていた。だから、梅田さんと私、今でも仲いいわけですけども、お互い戦友みたいな気持ちですよ。だけど、別にだれが悪いと言うつもりは全然ないのでですけども、だんだん世の中の方も右寄りになってくるし、こういう戦後処理ということがどんどん薄まっていくという中で、一〇年間、私たち歯を食いしばってやってきたわけですけども、アジア女性基金というのは、最初に想定したときに、もう少し慎重にいろんな問

ことでした。

だから、そういう意味では原前理事長も、それから今の村山理事長も、一生懸命なさったのは事実ですし、本当に立派だったと思います。人間、何をやるのでも、何か評価を期待したり求めたりしてやるべきではないし、私は別に人知れずやったこと、評価されないことなど、全然構わないのですけど、残念なのは、それだけのみんなが何も見返りを求めず本当に純粹にやっていたのに、その割に、この一〇年というスパンで切ってみると、やったことの成果があつたかな、被害者のためにどれだけ役立ったのかな、と考える時があります。

ただ私は、何度も言うように、それでもこれだけ日本の人たちがお金を寄付したこと、それからこういう真摯な気持ちでみんなが一生懸命やったことの意味は非常に大きいし、ともかく数は十分でないにしても、私たちが少なくとも台湾で差し上げた方たちは、本当に全員感動し、喜び、涙を流し、そして何よりもやはり一国の総理があれだけの謝罪をした例というのは、ある意味で歴史的なものだったと思うのです。だから、歴史的な資料として、おわびの手紙を出したとか、きちっとやっているんだとかいうことを後世の人に知ってもらいたい。今だに、謝らないとか謝ったとか言っているけど、ああいう真摯なものを出しているんですから、歴史的な資料とし

て残しておくということはすごく大事です。

アフターケアについて

和田 最後ですけど、いわゆるアフターケア問題について。

下村 私はここまでやって、私自身の気持ちからいうと、はい、じゃあ終わりました、さようならということであってはいけないんじゃないかということは一貫して申し上げている。だからといって、アジア女性基金を延々と続けるということにも反対してきました。それはやはり、償い事業が終わったら終わりという、一応そういうことで始まったんで。

ただ、アフターケアというのは、犠牲者はどんどん亡くなられていく中で、そんなに費用と手間というのかな、大きな組織をつくって人をたくさん雇ってという必要は全くないんで、一筋の何かのときのホットラインとか SOS とか、困ったときに手を差し伸べてあげられる、そういう仕組みというか、何かやはりここまでやったんで、あるべきだと思うのですね。

アフターケアっていったって、そんなに長いこと必要ないんで、やはり何かはぜひ残していただきたいというのが私の希望ですけどね。

和田 ありがとうございます。

(二〇〇六年八月一五日、健康事業総合財団理事長室にて)